The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈鄭玄の経学〉に表れた人物評価
Author(s)	南, 昌宏
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1992, 26, p. 17-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5156
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈鄭玄の経学〉に表れた人物評価

南　昌宏

はじめに

歴史上の人物に対しては、誰もが何らかの先入観を持っている。しかしながら、先入観の中には、極めて個人的な独断や偏見によるものがあり、そこから様々な誤解が生じる危険をもはらんでいる。また、万人に共通するイメージであっても、それが事実誤認である場合もある。著名な人物に対する、このような先入観というものは、恐らく、いつの時代にも存在したであろう。そして、この先入観や固定観念のうえに成り立っている最たるものが、経学である。〈周公・孔子は絶対善であり、桀・紂は絶対悪である〉という経学上の原理には、疑いを挟む余地はない。けれども、対象となる人物によっては、その評価にも揺れがあり、そこから逆に、論者の態度・立場などが窺えよう。

今回、考察を加えるのは、後漢末の儒家である鄭玄による人物評価である。鄭玄の注釈と鄭玄に相前後する時代の著作とに共通して見える人物について、各々の評価・表現の相異を考える。そこから、鄭玄の著述態度の一端を

明らかにしたい。評価の対象とする人物として、特徴を持った以下の三人を扱う。すなわち、①孔子の弟子である子路、②魯の君主である哀公、③漢の皇帝を廃して自ら帝位に即いた王莽。これら、各々立場を異にする三人の人物を取り上げることによって、より普遍的な特徴を明らかに出来ると考えるからである。なお、テキストとして、鄭玄『論語注』は金谷治編『唐抄本　鄭氏注論語集成』（平凡社、昭和五三年）を使用する。

一　子路の評価

凡そ、我々が持つ子路の人物像は、以下のようなものであろう。直情径行で単細胞、勇を好むあまり、短絡的な行動に走り、しばしば孔子に戒められる。司馬遷『史記』「仲尼弟子列伝」によると、孔子の弟子となる以前の子路は、次のように描写されている。

子路、性　鄙しく、勇力を好み、志　伉直にして、雄雞を冠し、豨豚を佩し、孔子を陵暴す。

まだ教育を受けていないとはいえ、子路の先天的な性質としては、我々が抱いているイメージと一致する。

それでは、後漢前後の著作に描かれている子路像は、どのようなものであろうか。王充『論衡』「問孔篇」には、以下のように記す。

子路　道に入ること浅しと雖も、猶　事の実を知る。（注　「道に入ること浅し」の理由として、黄暉『論衡校釈』では、『論語』「先進篇」の「由や、堂に升れり。未だ室に入らざるなり。」を挙げる。）

孔子の弟子となった後でも、子路には「道に入ること浅し」という印象が強いようである。

次に、『論語』「公冶長篇」の文について見てみる。

孟武伯　問う「子路は仁なるか」。子曰く「知らざるなり」。又、問う。子曰く「由や、千乗の国、その賦を治め使むべきなり。其の仁を知らざるなり」。（以下略）

これを、何晏は以下のように注する。

孔〔安国〕曰く「仁道は至大。名を全うす可からず」。

この注を、皇侃は次のように敷衍する。

言うこころは、子路　未だ全くは此の仁名を受くる能わず。故に〔孔子は〕「知らず」と云うなり。

また、『論語』本文につけた皇侃の疏は、次のように記す。

孔子　答うるなり。「知らず」と云う所以は、范寧　曰く「仁道は弘遠なり。仲由　未だ之れ有る能わず。又、指して仁無しと言うを欲せず。奨誘の教に非ざるが故に「知らず」と云うに託すなり」。……故に范寧　曰く「……孔子　武伯の重ねて問うを得て答う。又、直に「知らず」と云えば、則ち武伯　未だ〔質問を〕已めじ。故に且（しばら）く其の才伎を言い、然る後、更に答うるに「知らず」を以てするなり。言うこころは、子路の才勇　大

国の兵賦を治め、諸侯為るに任え使む可きなり」。言うこころは、唯　其の才〔能がその仕事に〕堪うるを知るのみにして、猶　其の仁を知らざるなり。

これらの注釈はいずれも、〈子路の仁が完全ではない〉ことを言っている。次に、「述而篇」の文を見てみる。

子の疾　病し。子路　禱らんことを請う。子曰く「諸れ有りや」。子路　対えて曰く「之れ有り。誄に曰く、「爾を上下の神祇に禱る」と」。子曰く「丘の禱るや久し」。

この文に、何晏は以下のように注する。

孔〔安国〕曰く「子路　指（旨）を失す。……」孔〔安国〕曰く「孔子の素行　神明に合す。故に曰く「丘の禱るや久し」と」。

皇侃は、次のように言う。

疾の甚だしきを「病」と曰う。孔子の疾　甚だしきなり。「禱」とは鬼神に祈禱して以て福を求むるを謂うなり。孔子の疾　甚だし。故に子路　孔子に請いて、孔子の為に福を祈求せんと欲するなり。「諸」とは「之れ」なり。孔子の言うこころは、死生　命有り、禱有るを欲せず。故に子路に反問す、此の祈禱の事有りや、と。心　許さざるなり。……子路　既に孔子の意に達せずして、旧き天地に禱るの誄を引く。孔子　之れを非るを欲せず。故に、我の禱るや已に久し、と云う。今、則ち復た須いざるなり。実に禱らずして「久しく禱る」と

云うは、聖人の徳　神明に合せば、豈　神明の禍いする所と為り、病みて之れに祈らんや。

両注釈ともに、〈孔子の真意を理解せずに、子路がチグハグな行為をした〉・〈孔子の素行は神明に合していて禍いを受けるはずもないのに、子路は妄りに福（即ち快癒）を祈ろうとしている〉・〈孔子は子路の提案を承諾せず、祈禱しなかった〉と言っている。

また、『論語』のこの章について、王充『論衡』「感虚篇」では

聖人　身を修め行いを正し、素より之れに禱ること日々久しく、天地鬼神　其の罪無きを知る。故に曰く「禱ること久し」と。……孔子　子路をして禱りて以て病を治め使めず。

と解釈し、王符『潛夫論』「巫列篇」では

故に孔子　子路を聴さずして云えらく「丘の禱るや久し」と。

と解釈している。王充・王符ともに、何晏・皇侃と食い違わないようである。

以上の例から見ても、やはり子路には〈仁を十分には体得できていない粗忽者〉といった印象が強い。これが、後漢から六朝にかけての一般的な子路像と言えよう。

もっとも、曹大家（班昭）「東征賦」には、「子路の威神を想い、衛人　其の勇義を嘉す」という、子路には好意的な表現がある。しかし、これも〈勇義〉という点における評価に過ぎず、従来の子路のイメージから懸け離れた

ものではない。また、『漢書』「古今人表」では、子路は「上〔の〕下（智人）」という高さに位置付けられている。かなり高く評価していると思えるが、これは、いわゆる〈孔門十哲〉を機械的にランク付けしたものであろう。『論語』「先進篇」に記される〈孔門十哲〉は、「徳行には、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語には、宰我・子貢。政治には、冉有・季路。文学には、子游・子夏」である。そして、「古今人表」による位置付けは以下の通りである。

上〔の〕上（聖人）……仲尼
上〔の〕中（仁人）……顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓
上〔の〕下（智人）……宰我・子貢・冉有・季路・子游・子夏

これを見れば、両者の対応は明らかである。従って、「古今人表」に見える子路の位置付けは、表の作者（班昭）独自のものではない。

それでは、鄭玄の著述から窺える子路は、どのような人物であろうか。『論語』「孟武伯問う……」の章の鄭玄注は次のように記す。

仁を問われて「知らず」と曰うは、武伯の仁を用うる能わずして、而も空しく〔原文欠く〕之れを問うを譏るなり。「賦」とは軍賦なり。「之れを治め使む可し」とは、其の才の〔原文欠く〕為るに任うるを言う。（注欠文を補う資料は未詳）

ここで非難されているのは、孟武伯である。〈孟武伯は仁者を用いる能力を持たないにもかかわらず、子路の仁の有無を質問する。孔子は、その質問に答える必要はないと感じ、「知らず」と言った。〉つまり、孔子が仁のことを口にしない原因は、子路にあるのではなく、孟武伯にあるのである。また、前記引用文中の欠字部分の後者には、皇侃の疏から推して、「諸侯」か、それに類する言葉が入るものと思われる。もとより、子路の仁については言及されていないが、その〈才〉は高く買っていると考えて良いだろう。この鄭玄の注からは、子路の〈才〉を評価する考えは窺えるが、〈仁〉のなさを隠そうとする考えは見られない。次に、「子の疾　病なり……」の章の鄭玄注には以下のように記す。

「禱」とは過ちを鬼神に謝するを謂う。〔「諸れ有りや」とは〕子路　禱りの礼を暁るや不やを〔孔子が〕観るなり。「誄」とは六祈の辞なり。子路　誄の辞を見て爾か云う。孔子　今　疾む、亦た当に過ちを鬼神に謝すべしと〔子路が〕謂うなり。孔子　自ら過ちの謝すべき無きを知り、「禱ること久し」と云う。素より恭粛にして鬼神を敬することを明らかにし、且つ子路の言に順うなり。

ここで孔子がとった行動は、〈子路の祈りが礼に適っているか否かを見て、「過ちを謝す」のではなく、「鬼神を敬す」のだということを子路に分からせたうえで、祈った〉ということであろう。鄭玄以外の解釈では、孔子は子路の提案そのものを苦々しく感じているのに対し、鄭玄の解釈では、子路の提案を承諾したうえで、その祈りの内容の是非を問うている。子路の行為を完全に否定しているわけではないのである。

このように、鄭玄の著述中の子路は、他の文献の子路と比較して、〈勇〉以外の点でも評価すべき対象として扱

われていると言えよう。

二　哀公の評価

哀公が治めていた頃の魯は、対外的には、力のない弱小国に成り下がっていた。国内的には、政治の実権を三桓に握られたままで、哀公は三桓を討つことにも失敗している。そのうえ哀公は、衛から呼び寄せた孔子を重用することも出来ず、孔子の死後に誄（弔辞）を贈ったのだが、その誄すら子貢に非難されている。このように、哀公は、儒家の立場からは厳しい目で見られがちな君主である。

その哀公の一四年に〈獲麟〉という大事件が起きる。『春秋公羊伝』には、時を失して麟が現れたことに対する孔子の言葉として「孔子曰「孰為来哉、孰為来哉」」を載せている。この言葉を、何休は次のように解する。

時に聖帝・明王無きを見、誰が為に来るかを怪しむ。

また、『春秋左氏伝』の「春、西に狩りして麟を獲たり」（哀公一四年）について、杜預注は次のように記す。

時に明王無く、〔麟が〕出でて遇（たまたま）獲らる。仲尼　周道の興らざるを傷み、嘉瑞〔の獣である麟〕の応無きに感ず。

この杜預の注からも明らかなように、何休が記す〈聖帝・明王〉という語は、元来は周王を対象にしているはずである。

ところが、王充『論衡』「指瑞篇」に載せる儒者の言葉には、哀公を対象にしていた形跡が窺える。山田勝美『論衡（中）』（明治書院・新釈漢文体系、昭和五四年）の訓読によれば、以下の通りである。

夫れ麟は聖王の為に来れば、孔子は自ら王たらずして、時王の魯君、麟に感ずるの徳無く、其の来るを怪しみて為す所を知らざるを以て、故に「孰為れぞ来る哉、孰為れぞ来る哉」と曰ふ。（注「時王魯君無感麟之徳」を、山田氏は上述のように訓読するが、「時王魯君〔には〕麟を感〔動〕するの徳無し」と解するほうが妥当であろう。）

一方、北京大学歴史系《論衡》注釈小組による『論衡注釈』（中華書局、一九七九年）では、「時王」は〈東周の君主〉を指し、「魯君」は〈魯の哀公〉を指すと言う。つまり、「時王」と「魯君」とを、山田氏は同一人物と考え、北京大学グループは二者の並列と考える。このように、複数の解釈があるものの、〈魯の哀公に徳が無かった〉とする点では、両解釈とも一致する。

また、『論衡』「譏日篇」には次のような王充の言葉がある。

春秋の時、衰えたりと謂う可し。隠・哀の間、不肖なること甚だし。

ここでも哀公は〈不肖の君主〉と見なされている。

次に、『論語』に見える哀公は、どのように表現されているだろうか。

哀公問いて曰く「何を為せば則ち民　服せん」。孔子対えて曰く「直きを挙げて諸々の枉れるを錯けば則ち民服す。枉れるを挙げて諸々の直きを錯けば則ち民　服せず」。（為政篇）（注　「挙直錯諸枉」について、邢昺・朱子ともに「錯」を「廃置・捨置」、「諸」を「群・衆」と解するが、鄭玄注本は「錯」を「措」に作り、「措」を「投」、「諸」を「之於」と解す。）

これに対する、皇侃の疏は以下の通りである。

哀公　徳を失い、民　服従せざれば、而ち公　之れを患う。故に孔子に問いて民　服するの法を求む。……亦、哀公　直きを廃し枉れるを用いるに由ってが故なり。故に范寧云えらく「哀公　賢を捨てて佞に任す。故に仲尼　此の言を発し、賢を挙げて以て民を服せ使めんと欲す」と。

民が服従しないのは、〈哀公が徳を失い、悪政を行っている〉ことが原因とされている。また、「八佾篇」には次のような章がある。

哀公　社を宰我に問う。宰我　対えて曰く「夏后氏は松を以てし、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす。曰く、民をして戦栗せしむ」。子　之れを聞きて曰く「成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めず」。（注　鄭玄注本は「社」を「主」に作る。）

これを皇侃は以下のように注する。

宰我〔は〕哀公　徳を失い、民　畏服せず戦栗・悚敬の心無きを見る。今、哀公に微諷して徳を改め行いを修め使めんと欲す。……〔「遂事は諫めず」とは〕此れ哀公を指す。言うこころは、哀公　悪を為すこと已に久しくして、民　戦栗せず。其の事　畢遂す。此れ豈　汝の諫止す可けんや。

〈民を畏怖させられないほどに、哀公が徳を失い悪を為すことは甚だしい〉と皇侃は考えている。次に「顔淵篇」の記述を見てみる。

哀公　有若に問いて曰く「年　饑え、用　足らず。之れを如何せん」。有若　対えて曰く「盍ぞ徹せざるや」。（以下略）

これに対する皇侃の疏は以下の通りである。

魯の哀公は愚暗。政は苛く賦は重し。故に民　其の業を廃す。所以に積年　飢荒し、国用　足らず、公　此の悪に苦しむ。故に有若に問いて飢えずして用　足るの法を求む。

〈魯の哀公は愚暗である〉と言われている。

以上の例から分かるとおり、〈魯の哀公は、徳を失って悪政を行い、民を服従させられなくなった愚か者〉と皇侃は理解していたのである。

それでは、鄭玄は魯の哀公をどのようにとらえていたであろうか。「哀公問いて曰く……」の鄭玄の注には、哀

公に対して次の一言があるだけである。

「哀公」とは魯君の諡なり。

これだけでは何とも言えないが、少なくとも皇侃のような悪評は与えていない。「哀公　社を宰我に問う……」には、鄭玄は以下のように注する。

哀〔公〕　臣を御するの権を失い、臣〔原文欠く〕。（中略）哀公　臣を御するの政を失い、〔原文欠く〕せ使めんと欲す。〔宰〕我の対えは哀公の意を成し〔原文欠く〕。（注　欠文を補う資料は未詳）

ここで哀公が失ったのは、徳ではなく、〈臣下を制御する権力・政治力〉とされている。当時、魯の実質的な支配者は三桓であり、「哀公……せ使めんと欲す」という注釈は、それでも努力する哀公の姿を表現したものではないだろうか。また、「顔淵篇」の「哀公　有若に問いて曰く……」に対する鄭玄の注は以下の通りである。

〔年〕穀の熟せざれば、国用を制して不足を計る。哀公は国を憂うるも、有若は人を憂う。故に焉れを徹せ令むる者なり。

人民に対する配慮を欠いていたかもしれないが、〈国を憂うるが故の重税〉という、もっともらしい理由を設けている。皇侃の「愚暗」と比べれば、相当に穏やかな表現と言える。

以上のように、鄭玄『論語注』における哀公は、必ずしも徳を失った愚昧な君主ではない。自分の力の及ぶ限り

において真摯な態度で政治に臨む、誠実な君主と考えられていたのではなかろうか。

三　王莽の評価

王莽には〈漢王朝を簒奪した極悪人〉というレッテルが貼られ、実際、多くの文献に記述されている王莽は、その通りの人間として非難の的になっている。

王充『論衡』は、次のように記す。

紂の悪は王莽に如かず。紂は比干を殺し、莽は平帝を鴆す。紂は以て嗣立し、莽は漢位を盗む。（語増篇）

鄒伯奇　論ずらく「桀・紂の悪は亡秦に如かず、亡秦は王莽に如かず」と。（感類篇）

王充は後漢初期の人間であるから、王莽を酷評するのは当然だが、その悪は桀・紂・始皇帝よりも甚だしいとしている。

王符『潛夫論』は、以下のように記す。

是の故に王莽は漢の公卿・牧守と漢を奪い、光武は漢の遺民・棄士と共に誅す。（本政篇）

莽は宰衡と為り、安漢公に封ぜられ、摂に居りて仮号し、身は南面に当たり、卒に以て位を簒うこと十有餘年。自ら以て之れに居ること已に久しく、威　立ち、恩　行われ、永らく禍敗無し。故に遂に心を肆にし意を恣にし、近きを私し遠きを忘れ、羣小を崇聚し、賦を重くし民を殫くし、以て無功を奉じ、動もすれば姦詐を為し、

之れを経義に託し、百姓を迷罔し、天地を欺誣す。自ら我を以て密にし、人は之れを知る莫けれども、皇天は上従り其の姦を鑒(み)、神明は幽自り其の態を照らす。豈　誤り有らんや。（忠貴篇）

邪性　勝れば、則ち忸怩して舎くに忍びず。故に王莽　位を竊みて慙じず。（慎微篇）（注　汪継培『潛夫論箋』によれば、「忸怩」は「忸怩」とすべきであり、「慣習」のこと。）

やはり、漢王朝簒奪のことを中心に非難している。これが、後漢における一般的な王莽像と言えよう。

一方、鄭玄は『周礼』の注で王莽に言及している。「地官、泉府」の「凡そ民の貸る者には……」の注には、次のように記す。

王莽の時、民の貸りて以て産業を治むる者には、但だ贏の得る所を計りて〔利〕息を受くるも、歳に什〔分の〕一を過ぐる無し。

「地官、遂人」の「其の野の土の上地・中地・下地を辨じて……」の注では次のように言う。

王莽の時、城郭中の宅に樹えざる者を不毛と為し、三夫の布を出ださしむ。（注「三夫布」とは就労しない者に課した成人三人分の税。）

「春官、大宗伯」の「五命は則を賜る」の注は、以下の通りである。

王莽の時、二十五成を以て則と為す、方五十里なり。今　俗に説く「子男の地」に合す。独り劉子駿等のみ古

に此の制有るを識る。

「俗説」とは、賈公彦『周礼注疏』によれば〈『礼記』「王制」に従う今文派の意見〉とし、孫詒譲『周礼正義』によれば〈殷の制度である「王制」を周の制度とする誤り〉と考えている。鄭玄は、『周礼』に従えば、「則」は方百里・方二百里であると考えている。

鄭玄の関心は〈王莽時代の制度を歴史的事実として客観的に記述する〉ということにある。その時、漢王朝の簒奪という、道徳的な価値判断がからんでくる問題とは、切り離しているのである。鄭玄は、王莽時代の制度を客観的に記述するだけで、積極的な評価もしないかわりに非難もしない。しかし、後漢という時代の制約を考慮すれば、非難しないだけでも、王莽に価値を認めていたと言えるのではないだろうか。

四　人物評価より見た鄭玄の態度

以上に見てきた子路・哀公・王莽に対する人物評価に共通して見られる鄭玄の態度は、次の二点であろう。即ち、①先入観を排除すること、②事実を重視すること、である。ここで言う「事実」は、〈経学上の事実〉を含み、その意味から、経書に記されている事柄はすべて事実と言える。

子路は、『礼記』に描写されている限りでは、礼に詳しいという印象が強い。

子路曰く「吾　之れを夫子に聞けり。喪礼は、其の哀　足らずして礼　餘り有るよりは、礼　足らずして哀
餘り有るに若かず。祭礼は、其の敬　足らずして礼　餘り有るよりは、礼　足らずして敬　餘り有るには若か

ず、と」。（檀弓篇上）

子路　魯を去らんとして、顔淵に謂いて曰く「何を以てか我に贈る」と。〔顔淵〕曰く「吾　之れを聞けり。国を去れば則ち墓に哭して后に行き、其の国に反れば哭せずして墓を展して入る、と」。子路に謂いて曰く「何を以て我を處（やす）んずるか」と。子路曰く「吾　之れを聞けり。墓を過ぐれば則ち式し、祀を過ぐれば則ち下る、と」。（檀弓篇下）

孔子　之れを聞きて曰く「誰か由を礼を知らずと謂うか」と。（礼器篇）

これらの言葉を見ると、勇に過ぎるとする一般的な子路像の偏りが分かる。

哀公は、『礼記』には「哀公問篇」の外、随所に登場するが、その文章を素直に読むならば、真摯に努力する謙虚な君主という印象が強い。〈魯の退廃や獲麟は、君主が徳を失ったからであろう〉という類推は、儒教的公式によって短絡的に成り立つ。しかし、『礼記』等に見える哀公の姿勢と「失徳」とは、あまりにも食い違う。その時、鄭玄は、「失徳」という〈類推〉よりも『礼記』の経文という〈事実〉を重視したのであろう。また、〈哀〉という諡は、張守節『史記正義論例』「諡法解」によれば、「恭仁短折を哀と曰う」とされる。これは「恭質を体すれども仁功　未だ施されず」という意味であり、まさに魯の哀公の事跡を表現したものと言える。

王莽が漢を簒奪したことは事実である。しかし、一方で『周礼』的国家を実現しようとしたこともまた事実である。しかも、『周礼』は、鄭玄の学問体系の中でも特に重要なものであり、『周礼』を実現できるか否かという場合、当然その鍵を握るであろう王莽は注目すべき人間であった。そして、鄭玄が最優先したのは、〈歴史的事実〉を確

認することであった。そのためには、漢王朝の簒奪者である王莽さえも価値ある人物として引いたのであろう。

こういった、〈事実を重視する〉という態度は、鄭玄の学問における基本的姿勢として、様々な形で鄭玄の著作の中に表れていると考えられる。

（大学院後期課程学生）